

香川大学 教育学部 後援会会報



2017.7 第14号

幸
楠会
KOUNANKAI

目 次

○ ご挨拶（後援会会長）	1
○ 香川大学教育学部後援会「幸楠会」の皆様へ（教育学部長）	2
○ コース・分野・領域等の紹介	
・学校教育教員養成課程	3
・人間発達環境課程	11
○ 教育学部附属教職支援開発センターの紹介	14
○ 教職大学院のご紹介	16
○ 学部だより	
・平成29年度行事予定	18
・平成29年度教育実習計画	19
・学校教育教員養成課程の活動紹介	20
・人間発達環境課程の活動紹介	22
・教員の研究活動紹介	25
・交流教員の活動紹介	29
○ 地域連携	
・香川大学教育学部と香川県教育委員会との連携協力に関する取組一覧	31
・第15回「未来からの留学生」	34
○ 国際交流	
・異文化交流の中で学生が学ぶもの	35
・国際交流体験記	37
○ 学生の活動	
・「第10回わくわくコンサート」の活動紹介	39
○ 学務事務からの情報	41
○ 進路選択と就職・進学支援活動	43
○ 香川大学大学院教育学研究科の紹介	49
○ 教育学部後援会（幸楠会）総会報告	51
○ 教育学部後援会（幸楠会）会則	56
○ 教育学部教職員名簿	57
○ 学生名簿（所属コース・領域・クラス）	61



ご挨拶

香川大学教育学部後援会会長

矢野 孝行



香川大学教育学部後援会（幸楠会）の会員の皆様には、日頃から後援会活動に対し、格別のご理解とご支援を賜り、厚く御礼を申し上げます。

また、本年4月にご入学されました学生の皆様とそのご家族の皆様に対し、心よりお祝いを申し上げます。

私は、昨年度より後援会の会長を務めさせていただいております矢野でございます。

今年度も役員一同、皆様のご助力を得ながら後援会としての責務を遂行して参りたいと存じますので、引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

さて、当後援会は、教育学部とご家庭との連絡を密にして、学部が実施する教育事業を支援することを目的として、昭和24年に設立され、70年近くもの長い歴史と伝統を有しています。

その間、皆様から支援いただいた貴重な会費等をもとに、学生のため、教育学部の発展のため、教育研究活動や就職活動のほか、地域交流活動や国際交流活動などに対する支援を行っているほか、後援会員の皆様と学部との連携を図るために後援会会報を発行するなどの事業を行っています。

ところで、今日では、国の内外において経済競争が年々激化しているほか、近隣諸国との国交問題あるいは国内における少子高齢化問題等、様々な問題を抱えている情勢にあり、このような情勢に対し、適切に対応し、積極的に行動していけるような有能な人材を一人でも多く社会に輩出することが教育機関には求められております。

このような要請に応えられる優秀な人材育成のため、当教育学部でも毛利学部長を筆頭に諸先生方において、日頃から積極的な教育研究活動やカリキュラムの検討・改善に取り組んでおられるところであります。

ところが、こういった教育研究活動等に必要な財源ともなる国から交付される運営費交付金も年々削減され、厳しい予算状況となっており、これがそのまま学部に配分される予算にも反映されて、学生の教育に必要な予算にも影響し、もし後援会の支援がなければ十分な教育もままならない状況にあります。

それでもなお、学生達に良質な教育を受けさせ、充実したキャンパスライフを送らせるためには、国の経費では補いきれないところの教育のサポート役として、本会の果たす役割が大変重要であると考えております。

教育学部後援会会員の皆様におかれましては、以上のような大学の置かれた状況にご理解いただくとともに教育学部を質の高い魅力のある学部にしていくためには、皆様方の側面支援体制が不可欠であることを併せてご理解いただき、本年度も引き続き本会の円滑な運営にご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、教育学部の諸先生方の日頃のご指導とご労苦に対し敬意と謝意を申し上げますとともに、会員の皆様の今後のご健勝を祈念いたしまして、ご挨拶とさせていただきます。

教育学部後援会「幸楠会」の皆様へ

香川大学教育学部長
毛利 猛



香川大学教育学部後援会「幸楠会」会員の皆様には、日頃から本学部の教育研究活動に対して温かいご支援を賜り、誠にありがとうございます。心よりお礼申し上げます。

さて、国立大学が法人化されて13年が経過しました。本年度は、第3期中期目標期間の2年目に当たります。香川大学は、人材育成や地域課題を解決する取り組みなどを機能強化の中核とする国立大学として、第3期中期目標期間中の取り組みを評価されることになります。教育学部としても、学校教員および生涯学習社会を支える教育人材の育成、そして地域と学校の課題解決に応える教育研究を通じて、地域創生時代の教育と文化の発展に貢献します。

教育学部においては、平成27年度から学校教育教員養成課程160名、人間発達環境課程40名を定員とする新しい体制に変わりました。初等教員養成を強化するために拡充された小学校教育コースには、生活・総合領域という新しい学生研究室が立ち上がりました。また、教育学研究科においては、平成28年度の4月に高度教職実践専攻（教職大学院）を開設しました。

教育学部のカリキュラムには、実践的に学ぶことと追求的に学ぶことを重視しているという特色があります。教育学部の学生たちは、大学4年間の実践的で追求的な学びを通して、実践力と専門性を高めていきます。

さらにもう一つ、教育学部生たちの成長の要因になっているものを挙げれば、教育学部ならではの、コースや領域を単位とする学生研究室的活動があります。豊かな学生文化がここで先輩から後輩へと引き継がれています。学部を代表する「未来からの留学生」などの地域開放行事は、学生研究室的の仲間が協力して準備や練習に取り組むことで、毎年開催できています。

香川大学教育学部には、いくつかの附属施設があります。高松市と坂出市の2地区にある附属学校園が6校。そして坂出市内にある特別支援教室「すばる」。さらに教職支援開発センターです。教職支援開発センターは、優れた教師になりたい学生を多方面から支援します。

香川大学教育学部は、教師になりたい人、あるいは社会に貢献する意欲をもつ人が、仲間と切磋琢磨しながら、大学4年間の学びを通して成長していくことを、全力で後押しします。「幸楠会」会員の皆様におかれましては、本学部の教育研究活動に対して、引き続きご理解とご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

【コース・分野・領域等の紹介】

◇学校教育教員養成課程

幼児教育コース

幼児教育コースは、人間の生涯にわたる発達と教育についての幅広い知識を背景に、乳幼児の心理や発達、保育・幼児教育の目標や内容、教育・保育課程や方法、制度や歴史などを総合的に学びます。さらに授業内外を通じて積極的に保育現場に出かけることで、乳幼児に接しながら実践的な体験を積み重ね、理論的な視点と結びつけて課題を見つけ、探求することが重視されています。

幼児教育コースの履修基準を満たすと、幼稚園教諭1種免許状と小学校教諭2種免許状、保育士資格を取得することができます。そのため、幼稚園および小学校教諭免許状に必要なカリキュラムに加えて、保育士資格取得のために必要な授業や実習も準備しています。多様なカリキュラムを通じて、家庭・地域における子育て支援も視野に入れた保育者（幼稚園教諭・保育士）の養成を目指しています。

専任教員は、岡田知也（幼児音楽、保育内容の指導法（幼児音楽）などを担当）、片岡元子（保育原論、保育者論などを担当）、藤元恭子（幼児体育、保育内容の指導法（身体表現）などを担当）、松本博雄（乳幼児心理学、保育内容の指導法（言葉）などを担当）、吉川暢子（幼児図画工作、保育内容の指導法（幼児造形）などを担当）、松井剛太（社会福祉原論、家族援助論などを担当）です。現在、幼児教育コースには、1年生9名、2年生9名、3年生10名、4年生11名の計39名が在籍しています。就職状況も良好で正規採用率も高く、卒業生の多くは幼稚園・保育所等の現場に就職し、活躍しています。



教育課題探究分野・教育領域

教育領域は、各教科の枠を超え、学校教育が抱える根本的な問題や今日の課題について、教育学を基礎として学ぶ領域です。本領域は、教員に必要な授業方法や子ども理解の方法に関する知識や技能を身に付けるだけでなく、その基礎を支えている教育学的なものの見方、考え方の習得を目ざしており、演習（少人数でのディスカッションを中心とするゼミナール形式の授業）と卒業研究（卒業論文の執筆）を重視した指導を行っています。

平成29年度は、男子6名、女子14名、計20名の2年生が新たに加わりました。3年生19名、4年生18名の総勢57名から構成される、活気あふれる大集団です。海外に目を向ける学生も多く、昨年はタイやニュージーランドとの国際交流プログラムに多くの学生が参加してくれました。また、「トビタテ！留学JAPAN 日本代表プログラム」に応募して、現在1名の学生が留学中です。

教育領域の学生が共通に受講する授業をご紹介します。まず2年次の学生は、教育領域の全教員が数回ずつ順番で担当する「教育学演習Ⅰ」（通年）を受講します。時には、この演習プログラムに栗林公園の探訪を加えることもあります。写真はこの時（2017年4月）のものですが、この授業をとらえて教育領域の教員とのつながりを深めます。次に、2年次、3年次の学生が受講する「教育学チュートリアル」（前期）があります。この授業では、2学年が4つの異学年混成集団に分かれ、教員の指導のもとに共同研究を進めていきます。研究成果は8月に開催されるオープンキャンパスや夏合宿で披露します。2年次末に指導教員を選ぶと、3年次と4年次では、指導教員が開講する「教育学演習Ⅱ」（3年次）、「教育学演習Ⅲ」（4年次）を受講します。これらの演習を通して、より高度な教育学的なものの見方、考え方を身に付けながら、自らの研究テーマを見つけ、卒業論文を執筆します。

この他にも、教育領域で取り組む行事があります。そのうちの一つに、学生が地域の子どもたちに様々な出し物をする「未来からの留学生」という学部イベントでは、毎年、2年生が創作劇を発表しています。

教員は加野芳正、毛利猛、櫻井佳樹の3名に、香川県教育委員会との交流人事により大学教員として指導にあたる佐藤盛子、十河妹の2名を加えた計5名です。これら交流人事教員は小学校での豊富な経験を活かし、学生の実践的な力量形成に貢献しています。

本領域を卒業した学生の大半は小学校教員として県内外で活躍しております。平成29年3月の卒業生は16名であり、そのうち小学校教員10名（正規採用9名）、高等学校常勤講師1名、公務員2名、民間企業3名でした。例年に比べて教職に就く学生は少なかったのですが、小学校教員の養成を中心に、個人の特性にあった就職指導を行っています。



教育課題探究分野・心理領域

心理領域では、教育者として必要な心理学的知識と技能の習得をめざしています。2年次から、教職科目と並行して、必修科目である心理学実験と心理検査がはじまります。2週間に一つずつ実験や検査を実施し、レポートにまとめ添削指導を受けながら専門的な力をつけていきます。3年次になると、必修科目として教育心理学演習と教育心理学実験も加わり、毎週、学術論文の購読や心理統計法を用いたデータ解析、データをわかりやすく提示するための図表の作成や研究成果のプレゼンテーション等に取り組み、その中で研究を遂行し、人に伝えるための力を身に付けていきます。こういった力は、4年次の卒業研究に結びつくだけでなく、学校現場での実践研究や、将来の臨床心理士等の資格取得にもつながるものです。

平成29年度の教育学部心理領域の学生数は、2年生10名、3年生12名、4年生11名の合計33名です。また、教育学研究科の心理専攻には、2名の大学院生がいます。教員は、宮前淳子、大久保智生、岡田涼の3名です。

心理学教室では、年間を通してさまざまな行事を行っています。新2年生を対象としたガイダンスをはじめとして、歓迎会、夏合宿、忘年会、送別会などを開催し、心理学教室の懇親を深めています。今年度も、4月に3年生が中心となって新2年生を歓迎する会を開催しました。また、例年1泊2日の夏合宿を行っています。夏合宿では、4年生による卒業論文の中間発表に加えて、3年生による追試研究の中間発表も行われました。夜には皆でバーベキューや全員参加のゲームを行い、楽しい夏の思い出を作っています。また、秋に開催される「未来からの留学生」では、2年生が中心となって「さかさワールド」の講座を企画し、たくさん子どもたちとともに活動します。来場する子どもたちが楽しめるように、前日から教室の飾りつけを行い、当日も役割を決めて各自が積極的に行動するなど、準備から後片付けまで、皆で協力して活動します。そして2月末には、3年生の企画実行により、心理領域の学生と教員が全員参加しての卒業論文発表会が開かれます。昨年度も、大学生生活の集大成として、それぞれの学生が自信をもって自分の研究を発表し、心理学教室を巣立っていきました。心理領域では、学生がさまざまな知識を身に付けるとともに、仲間とともに学ぶ楽しさを実感できる1年を過ごしています。



教育課題探究分野・生活・総合領域

生活・総合領域では、子どもたちが気づくことのおもしろさを実感し、その気づきを広げて、深めていけるように指導できる教員の養成をめざします。環境問題、防災、国際化や情報化など、現在、子どもたちが直面しているさまざまな課題に対して、教員が積極的に、そして柔軟にかかわっていくことが重要であると考えています。

生活・総合領域は、平成27年度に、小学校教育コース教育課題探究分野の一つとしてスタートしました。平成29年4月に新たに10名の2年生を迎え、現在、3年生8名と合わせて、学生数は合計18名となりました。教員は、北林雅洋、寺尾徹、轟木靖子と山下直子の4名です。4月には、3年生が中心となって、新2年生を対象としたガイダンスや歓迎会を開催し、今後は小豆島での合宿などの領域の懇親を深める行事も計画しているところです。

領域独自の授業としては、2年生向けの「総合教育基礎演習」、3年生向けの「総合教育演習」「総合教育実践研究」などがあります。昨年度の「総合教育基礎演習」では、希少糖がとれる唯一の植物「ずいな」をはじめ、トマトや朝顔などの植物の栽培をおこなったり、豊島での公民館祭りの活動、三木町防災センターでの外国人向けの災害援助研修やアメリカからの短期留学生の研修などにも参加し、それぞれの現場で貴重な体験をすることができました。また、今年度、新たに開講する「総合教育実践研究」では、高松市内のコミュニティセンター等の公共施設や香川県内の学校関係施設等で実施されている地域に関わる事業に参加して、フィールドワークをおこなう予定です。さらに、「未来からの留学生」「オープンキャンパス」などのイベントにも、学生が企画を検討して参加します。これから生活・総合領域を一つ一つ作り上げていくため、新たな試みに積極的に取り組んでいます。



特別支援教育分野・特別支援教育領域

平成 29 年度の小学校コース，特別支援教育領域は，担当教員 4 名（西田智子，坂井聡，小方朋子，中島栄美子），学生 60 名（2～4 年生）でスタートしています。

近年，幼稚園・小学校・中学校・高等学校の通常学級に在籍する発達障害のある子どもたちに対する支援と指導について関心のある学生が増えてきています。これら学生の関心は，卒業論文のテーマともなっており，それは，実践的な研究につながっています。

学生たちは大学の授業以外の場でも，ボランティアに参加したり，自分たちで障害のある子どもたちとの活動を企画したり，香川大学バリアフリー支援室でのピアサポーターとして活動したりと，積極的に活動しています。学生のボランティアである「ちびっこ教室」は，今年度高松市から表彰されました。

本領域では，特別な教育的支援を要する児童・生徒が学ぶ特別支援学校教諭免許状（1 種）と小学校教諭免許状（1 種）の取得を目的としています。本領域の卒業生は，特別支援学校及び，小・中学校の通常の学級，特別支援学級，あるいは病院内に設置される院内学級の担任として活躍しています。また，小学校・中学校における通級指導教室の数も増えてきており，通常学級にいる発達障害のある子どもたちに対する適切な支援と指導の場においても，本領域への期待は大きくなっています。これらの期待に応えることができるように，本領域では，教育と医学，心理学の連携を重視し，理論を背景とした実践力をつけることができるようにカリキュラムを工夫しています。

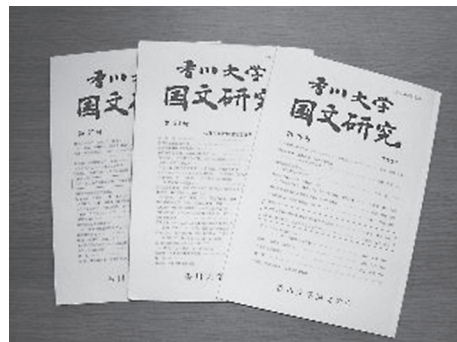


教科教育分野・国語領域

当研究室では，日本古典文学・日本近代文学・日本語学・中国古典文学・書道・国語科教育の各分野にわたって，専門とする教員の下，日々研鑽を積むべくカリキュラムが構成されています。小・中・高の「国語」の教員免許の他，高等学校「書道」の免許を取得することも可能です。また，司書教諭の資格も，多くの学生が取得しています。

国語領域に所属する教員は 6 名。学生は，合わせて 36 名。平素の授業の外に，新人歓迎会・夏合宿・スポーツ大会・研修旅行等々，多彩な研究室行事があり，研究室内の親睦を深めつつ，集団行動や礼儀などを学んでいます。また，大学祭恒例の「和風茶屋」の出店やオープンキャンパスでの領域紹介，「未来からの留学生」の百人一首体験など，学生が主になって企画・運営を行っています。さらに，附属小・中学校の国語科教員にも，本研究室の卒業生が数多く，教育実習等で大変熱心な指導を受けています。

また，「香川大学国文学会」という学会を組織し，上記の各専門分野に関する研究を深めていることは当研究室の特色でしょう。昭和 28 年の第 1 回卒業生以下の卒業生・研究室の歴任教員を会員とする組織で，毎年 1 回欠くことなく『香川大学国文研究』誌を発刊しており，質量ともにその内容の充実ぶりは，全国的にもトップレベルの研究誌であると自負しています。平成 23 年，本学会の元会長である佐藤恒雄名誉教授が，学界最高峰の賞である，「日本学士院賞」を受賞されたことは，特筆すべき出来事でした。このように，本学会を通して積み重ねられた研究活動と学問の交流は，国語研究室の誇るべき財産だと考えます。



教科教育分野・社会領域

社会領域は、伊藤裕康（社会科教育）・鈴木正行（社会科教育）・新見治（地理学）・守田逸人（日本史学）・高倉良一（法律学）の5名の教員と学生51名（2年生20名、3年生20名、4年生11名）から構成されています。

本領域では、小・中学校の児童・生徒の社会的なものの見方・考え方を育み、学ぶ喜びを感じられる社会科教育の実践者を養成することを目指しています。また、希望する者は、必要な科目を履修することで高等学校での「地理歴史」「公民」の教員免許を取得することもできます。

学生が、社会科という教科への理解を深め、社会科の内容に関する専門的知識を修得し、その内容を効果的に教えるための技術を身に付けることができるよう、多彩な科目を開設しています。内容に関する科目としては、歴史学、地理学、法律学、政治学、社会学、経済学、哲学、倫理学等の講義を開設しています。社会科への理解と教育技術については、社会科教育の原理と方法・実践に関する科目を用意しています。さらに、今年度からは、学生を鍛えるべく、社会科特別演習を通年開講としています。

これらの科目中、学生は、2・3年次には、講義形式、演習・実習形式の科目を履修し、3・4年次には、附属の小・中学校で教育実習に取り組みます。4年次には、これまでの学習成果を踏まえた集大成として、指導教員の個別指導を受けつつ卒業論文の作成に取り組みます。

学生のための研究室も、これまでの部屋の2倍近く広い研究室に移動し、学生と教員が連携しながら様々な活動に取り組んでいます。

年間行事としては、新歓コンパ、卒論構想発表会、オープンキャンパスでの3年生による高校生向けの授業、附属学校の社会科教員も参加しての教育実習報告会、大学祭での模擬店出店、教育学部「未来からの留学生」事業への参加、卒論中間発表会、12月の社会科合宿、2月の卒論最終発表会、追い出しコンパ等があります。勉強だけではなく、これらの活動に意欲的に参加することを通じて、領域所属の学生は人間として大きく成長していきます。

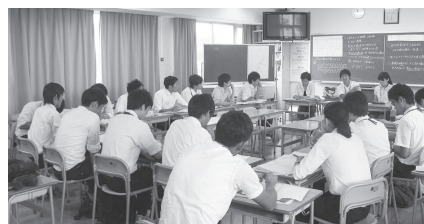


教科教育分野・数学領域

数学領域では、代数学、幾何学、解析学、確率・統計、コンピュータ、数学教育の学習・研究を基盤とし、算数・数学教育の豊かな実践的力量をもつ教員の養成を目指しています。そのために、2年次では数学の基礎的事項を習得し、3年次には、より高度な数学的内容を学習するとともに算数・数学教育についての学習を一層進めます。3年次9月の主免教育実習終了後には、学生各自の興味や関心に基づき、数学・数学教育の分野を絞って学習を深めます。4年次には卒業研究に取り組むと同時に、進路選択という大きな課題と向き合うことになります。そのような節目を経て、学生は、数学を1つの柱として教職への力量を形成していきます。

2年次には「未来からの留学生」、3年次には8月のオープンキャンパスのときの模擬授業においてもその成果を現しています。

算数・数学に関する国際調査の結果、「算数・数学は楽しい」と思っている日本の児童・生徒の割合は、世界の他の国・地域に比べて低いことが明らかにされています。算数・数学を楽しもう児童・生徒を育てるには、指導する先生自身が算数や数学は楽しいと思い、感じ考えていることが必要です。数学領域では、全ての学生がそのように感じ考えるとともに、算数や数学がおもしろい・楽しいと感じ考える児童・生徒を育てることができるようになることを願いつつ、学生の指導にあたっています。（写真は、数学領域の学生が、附属学校の先生の指導のもとで、算数・数学の教材や授業作りについて討議を行っている様子を写したものです。）



教科教育分野・理科領域

理科領域では、自然科学の基本的な内容についての確かな理解に基づいて、わかりやすくおもしろい理科の授業をつくることのできる教員の養成を目指しています。そのために学生たちは、物理学・化学・生物学・地学について、基礎的な内容を理解し、それらをわかりやすく教える手法・技能を学びます。また、理科教育の目的や目標、授業づくりの考え方などについても実践的に学びます。

理科領域の教員たちは、限られた時間の中で効果的に授業が実施できるよう、連携を密にして共同して授業内容の改善をすすめています。特に、学生たちが実験・観察教材を身につけようとする授業（理科授業研究Ⅰ）や単元の指導案の作成を試みる授業（理科授業研究Ⅱ）においては、自然科学各分野の専門教員と理科教育学の教員がいっしょになって、それぞれの専門性を活かし・補い合って指導をしています。理科領域では、地域の子どもたちに科学のおもしろさを体験してもらう機会を重要視して、いくつかの行事を企画して実施しています。学生たちが主体になって、科学体験活動を企画・立案し、準備し、協力し合って実施します。それらを通して学生たちは、主体性やリーダーシップ、協調性などを伸ばしていきます。そして4年次の卒業研究では、物理学・化学・生物学・地学・理科教育学に関する特定のテーマについて、専門的研究を行ない、学生たちは専門性を更に深めています。

また、2011年度から香川県教育委員会と共同して実施している理数系教員（コア・サイエンス・ティーチャー）養成拠点構築事業において、多くの理科の学生たちが教材CST養成プログラムを受講し、附属学校や大学で開催される現職教員向けの研修会に参加し、研鑽を積んでいます。



（写真は2016年10月に行われた「未来からの留学生」で活躍した理科領域の学生たちの様子です。）



教科教育分野・音楽領域

現在、音楽領域（小学校教育・中学校教育コース）には13名の学生が在籍しています。

学生たちは音楽科教育全般について学ぶとともに、自らが選択した分野の研究を深めています。教員は音楽科教育1名、声楽1名、器楽（ピアノ・木管楽器）2名の4名で指導に当たり、それぞれの分野の研究も行っています。

学生主体の主な年間行事としては、11月に行われる定期演奏会があります。定期演奏会は昨年度43回目を迎えました。高松市図書館サンクリスタル視聴覚ホールでの開催も3年目となりました。オーディションを行い、独奏や室内楽、全員合唱のプログラムに教員も参加して開催しています。

そのほかにも、瀬戸内国際芸術祭の「大島コンサート」への出演、高松市美術館での「エントランス・ミニコンサート」への参加・出演、「未来からの留学生」、「キャンパス・ランチ・カフェ」、「わくわくコンサート」での演奏や実行委員会への参加、特別支援学校や公立小学校での演奏やボランティアとしての参加など多彩な活動を行っています。

学生達は、学びと音楽活動を重ね合わせるにより、音楽の実践力のみならず、総合的な人間力を高めています。



瀬戸内芸術祭「大島コンサート」

キャンパス・ランチ・カフェ

盲学校訪問



楽器体験（わくわくコンサート）

附属での授業



高松市美術館でのコンサート活動

未来から留学生

教科教育分野・美術領域

美術領域では、子どもの創造力が伸び育つ土壌や育ちのプロセスを、幅広く柔軟な視点から捉えることのできる教員養成のために「造形芸術とその教育に関する諸分野の基礎的な能力・知識を修得する」、「各自に適した表現分野を極め、自分自身を語り表す力を付ける」、「自らの研究・制作を通して教育的視点から造形表現の意味を見出す」などを目標としています。

美術領域の所属する学生は、美術科教育全般について学ぶと共に、それぞれが選択した美術専門領域で担当教員の指導・支援の元、美術制作や美術教育学を研究しています。

専門領域としては、理論的な立場から探究する美術教育、美術理論・美術史、また、美術理論美術制作の立場から探究する絵画、彫刻、工芸、デザインなどがあります。

本年度は美術教育を幼児教育の吉川、絵画を古草、工芸を倉石、彫刻は特命教授の池田先生、デザインを特命教授の谷川先生が担当しています。美術理論は美術教員全員で担当しています。

現在、美術教育コースには6名が在籍し、「未来からの留学生」への企画参加や、毎年の「卒業制作展」の開催、また学外での芸術活動の企画や積極的参加、そして学部内外行事に関連する各種ポスター制作など主体的活動を行っています。卒業生は民間の美術関連企業や教職などに就き活躍しています。



<卒業展覧会>



<絵画授業>



教科教育分野・保健体育領域

保健体育領域における研究領域は、「体育科教育学」（担当：米村耕平，上野耕平）、「運動学」（担当：山神眞一，石川雄一）、「体育学」（担当：上野耕平，米村耕平）、「学校保健」（担当：宮本賢作）の4つの分野で構成されています。各分野とも、演習を中心にした実践に繋がる理論について学習していきます。また、実技については、陸上、水泳、球技、武道、スキー、身体表現など専門的な実技能力の習得とともに、その運動の指導技術についても学ぶことができます。特に、体育教師の指導力の育成には力を入れており、2年次から4年次まで大学生を生徒役に見立てて実際に授業を行う「模擬授業」を中心とした授業が展開されています。ここでは、体育授業を行っていく上で必要な授業をマネジメントしていく力や望ましい教師の行動、教材づくり、自らの体育授業を評価する力、そして体育授業を改善し創造していく力など授業実践に役立つ多くのことを学ぶことができます。

現在、保健体育領域を専攻している学生は、2年生16名、3年生17名、4年生12名、大学院生6名の合計51名です。学生が中心となって学習会やスポーツ大会を行ったり、附属学校との積極的な関わり合いを通して小学生や中学生に対する運動指導の補助を行ったり、学生自らが主体となって将来に向けた学びを活発に展開しています。保健体育領域は学生、大学教員、附属学校教員、そして卒業生との連携も密でありとても活気のある領域です。



体育授業研究Iにおける模擬授業の一コマ

教科教育分野・技術領域

技術領域は、科学技術の成果を基盤とする応用科学及び生活科学に関する分野を主要な教育・研究課題としており、ものづくり（金属、木材加工）、エネルギー変換（機械機構学、電気電子）、生物育成（栽培・園芸）、情報などの分野があります。これらの学習を通じて現代科学技術の一端を習得し、新たな科学技術にも柔軟に対応できる基礎的・基本的な知識及び技術の涵養することに重点を置いた教育を実践しています。なお高等学校一種免許「工業」の免許取得も可能であり、これに伴い情報関連分野の授業を充実させ、プログラミングや計算機の組立て、OSのインストール、ネットワークの構築など、理論のみでなく実践的・体験的な学習活動の指導ができるカリキュラムが用意されています。現在、学部学生には、2年生2名、3年生2名、4年生8名の計12名が在籍しています。学部主担当（小学校・中学校）教員は、宮崎英一（技術科教育法・機械）、黒田勉（技術科教育法・情報）、山田貴志（電気）の3名、副担当は松下幸司（情報）1名が配属されています。技術領域では、未来からの留学生での展示や親子ものづくり体験講座の企画・実施、学校現場や企業への訪問を通じた学生へのキャリア支援、学会発表や情報リテラシー参考書執筆など学部内外での教育研究の活動を広く精力的に行っています。



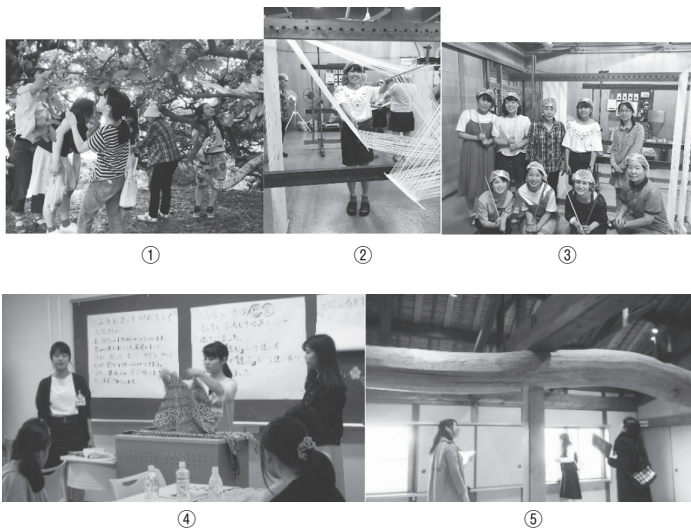
授業風景（教職実践プレ演習での発表、技術科授業研究Ⅰでの若手教員との協働学習）



教科教育分野・家庭領域

家庭領域では、衣・食・住生活と家族（子どもから高齢者まで）、消費生活、環境など、生活に関する諸分野について理論的・実践的に学んでいます。めざしているのは、現代社会に存在するさまざまな生活課題の解決に向けて主体的に考え行動できる生活者の育成です。

家庭領域の行事として、卒業論文の構想発表会、最終発表会、2年生の歓迎会、卒業生を送る会等を実施しています。昨年は領域内の学生と教員の親睦と研修を兼ねて小豆島合宿を行いました。オリーブ園見学、すもも狩り（写真①）、手延べそうめん（写真②③）等を体験しました。また「未来からの留学生」（昨年は「風呂敷敷名人になろう！」）への参画（写真④）、オープンキャンパスの企画運営等、大学や学部主催の活動にも学生が主体となって積極的に関与しています。領域授業の主な指導教員は、貞廣美津子（家庭科教育）、小川育子（被服学）、村上祥子（食物学）、時岡晴美（家庭経営学）、妹尾理子（住居学）、松井剛太（保育学）で、少人数の授業が多いため、さまざまな実験・実習など体験的な学びやフィールドワーク（写真⑤）も行いながら活発に学んでいます。



教科教育分野・英語領域

英語領域は、英語科教育、英米文学、英語学、英語コミュニケーション、異文化理解の諸分野で構成されています。授業は、英語専攻と言うにふさわしい十分な英語力を身につけた学生を対象に、講義、演習等の形で行われます。いずれも、英語教師を目指すものが将来英語を教える上で必須の知識・教養および技能を身につけるべく開講されているものです。授業・レポート等が英語によるものもあり、また、卒業論文は英語で書くこととなっています。

英語領域の活動としては、毎年夏休みに開催されるオープンキャンパスにて高校生に英語領域学生の日常を紹介しているほか、秋に開催される学部公開行事「未来からの留学生」に参画し、特に2年生と4年生を中心に、県下の小学生を対象に all English で活動を行うクラスを開講しています。なお、アメリカやカナダ、イギリス等英語圏の大学、あるいは語学学校へ留学・研修に向かう学生も毎年数名います。

英語領域の学生指導には英語教育講座の教員があたりますが、その担当専門授業科目は次の通りです。

竹 中 龍 範：英語科教育論、英語科教育法、LL演習ⅠA・ⅡA

永 尾 智：英語史、英語学演習Ⅰ・Ⅱ、英語科内容学演習

Batten, Paul G.：英語科授業研究Ⅰ・Ⅱ、LL演習ⅠB・ⅡB

また、全員が共通教育英語科目、ならびに大学院教育学研究科教科教育専攻言語系教育コース英語分野の専門科目を担当しています。英米文学領域については、人間発達環境課程国際理解教育講座の松島欣哉教授に米文学史をご担当いただいています。平成26年3月に定年退職された田村道美教授の後任不補充は解消できておらず、今年度も田村先生に特任教授として英文学史と英国散文Ⅰをお願いしております。なお、平成28年3月末付で転出された山内玲准教授の後任不補充も続いているため今年度も米国散文Ⅰは休講措置を取らざるを得ない状況です。

平成29年度の学生数は、2年生9名（うち小学校コース学生3名（平成27年度入学生より小学校教育コース英語領域が設定されています。）、3年生8名（うち小学校コース学生3名）、4年生9名（うち1名が留学中）となっています。



<平成28年10月実施の「第1回英研研修会」>



<平成29年2月実施の「追いコン」>

◇人間発達環境課程

発達臨床コース

発達臨床コースは、現代社会においてより一層重要になっているカウンセリング・マインド、福祉マインドを持った人材の養成を目的にしています。子どもから高齢者にいたる生涯規模での発達について、臨床心理的視点と社会福祉的視点から学習するコースです。このため臨床心理士資格の基礎となる授業科目とともに、生涯発達を福祉的観点から考察する授業科目を準備しています。また、これらの発達についての総合的な学習とともに、老人福祉施設や背少年育成施設での実習を通して、問題解決能力の育成を図ることもカリキュラムの大きな柱です。

発達臨床コースのカリキュラムは心理教育と福祉教育を横軸に、年次進行する基礎教育、実践教育・発展教育を縦軸に構成されています。学生は心理学や臨床心理学を中心として、福祉系の科目もあわせて履修します。平成29年度現在の専任教員は、竹森元彦、西岡けいこ、橋本忠行、林智一、山田俊介（五十音順）学生数は、68人です。



人間環境教育コース

人は、自然、様々な共同体（家族、学校、地域、国家等々、広く社会）、有形無形の文化（伝統、歴史、宗教、言語等々）など、さまざまな環境の中で生きています。人間環境教育コースは、それら多様な環境と人間との関わりを、生涯学習の視点から実践的に研究し、必要な対策や、豊かで新たな環境づくりを提案する人材を養成するコースです。

カリキュラムの特徴として、人文・社会・自然・芸術分野に至る多様な領域の講義や演習に加えて、次のような実践系の授業科目を柱としています。すなわち、学生自らテーマを設定して調査研究する演習科目、施設や機関を訪問して調査し、研修等で実践的な知識や経験を得る実践研究科目、環境に関わる問題にどう学問的に取り組むかを広い視野から学ぶため、教師と学生が一体となって共同研究を行うプロジェクトを中心とした教育科目です。社会調査の技法やIT機器による情報処理技術などスキルを習得することも重視しています。



学生は3年次からいずれかのプロジェクトに所属して研究を進めます。現在のプロジェクトと担当教員は下記の通りです。

「環境論・対策」班：時岡晴美、青木高明

「環境創造・イベント（遊びと人間）」班：佐々木信行、古草敦史、三宅岳史

「人間研究」班：石川徹、寺尾徹、中谷博幸、村山聡

「メディア環境」班：青木高明、寺尾徹、三宅岳史、村山聡

平成29年現在の学生数は41名です。学部のオープンキャンパスや「未来からの留学生」の担当講座なども毎年積極的に参画し、学年を超えたグループで活発に企画・実行しており、これらの活動もコースの目標を体現する場のひとつとなっています。

卒業後は、コースの性格に相応しく、公務員、教員、一般企業など、幅広い分野で活躍しています。昨年度までに、約390名の卒業生を送り出しました。残念ながら人間発達環境課程が今年度で募集停止になってしまいますが、学生も教員も変わらず元気に活動しています。

国際理解教育コース

コース紹介

国際理解教育コースは、国際社会の文化的・社会的特質に関する十分な理解を基礎に、21世紀のあるべき国際社会を創造するための教育実践力のある人材を養成するコースです。「多文化社会」、「日本語文化・日本語教育」、「英語圏文化と英語コミュニケーション」の3領域からなります。教室での原書講読や、大学外でのフィールドワーク・インターンシップなど、多様な演習・実習形式の授業を通じた実践的なカリキュラムのもと、理想的な多文化社会のあり方を考察し、その基礎となる異文化間コミュニケーションの理念と技能を学習します。また、留学生や帰国・外国人児童生徒等、国内外の日本語学習者に対する指導を行う日本語教員に必要とされる知識や技能も学ぶことができます。コースでの学習を通じて、国際社会において活躍することのできる能力を修得することが目標です。

カリキュラムは、大きく全学共通教育と学部教育から構成されます。学部教育は、学部共通科目、人間発達環境課程共通科目、そして国際理解教育コース科目からなります。国際理解教育コースの科目は、さらに基礎研究、実践研究、発展研究の授業群から構成されます。本年度の学生の構成は、2年生13名、3年生12名、4年生23名（過年度生を含む）です。5名の教員（うち主担当3名）が指導に当たっています。

また、本コースの大きな特徴として、外国に留学する学生が毎年のようにいることが挙げられます。留学先は、提携先の大学を中心に、アメリカ合衆国、ニュージーランド、中国、タイなど世界各地に広がっています。さらに本コースには、日本語教員を目指す者が受験する「日本語教育能力試験」に関わる講義、演習、教育実習科目が揃っています。また、「国語」・「英語」の中学校・高校の教員免許を取得することも可能です。



課程・コース一覧

【4年生】

課程	コース		領域
学校教育教員 養成課程	学校教育基礎コース		教育領域, 心理領域
	幼児教育コース		
	特別支援教育コース 小学校サブコース 中学校サブコース		
	教科教育コース	小学校サブコース	国語領域, 社会領域, 数学領域, 理科領域, 音楽領域, 美術領域, 保健体育領域, 技術 領域, 家庭領域
		中学校サブコース	国語領域, 社会領域, 数学領域, 理科領域, 音楽領域, 美術領域, 保健体育領域, 技術 領域, 家庭領域, 英語領域
人間発達 環境課程	発達臨床コース		
	人間環境教育コース		
	国際理解教育コース		

【1～3年生】(平成27年度より変更)

課程	コース	分野	領域
学校教育教員 養成課程	幼児教育コース		
	小学校教育コース	教育課題探究分野	教育領域, 心理領域, 生活・総合領域
		特別支援教育分野	特別支援教育領域
		教科教育分野	国語領域, 社会領域, 数学領域, 理科領域, 音楽領域, 美術領域, 保健体育領域, 技術領域, 家庭領域, 英語領域
	中学校教育コース		国語領域, 社会領域, 数学領域, 理科領域, 音楽領域, 美術領域, 保健体育領域, 技術領域, 家庭領域, 英語領域
人間発達 環境課程	発達臨床コース		
	人間環境教育コース		
	国際理解教育コース		

学校教育教員養成課程の領域への所属, 人間発達環境課程のコースへの所属は, 2年次からです。

【教育学部附属教職支援開発センターの紹介】

附属教職支援開発センター（旧附属教育実践総合センター）は、平成 27 年 4 月より名称を変更し、実践的指導力の向上及び教職支援体制の充実のため、学部と附属学校園、香川県教育委員会等と連携・協働して、実地教育及び教職支援、教育開発の推進的役割を果たすことを目的として、新たな活動に取り組んでおります。

本センターは、実地教育推進部門、教職支援推進部門、教育開発推進部門の 3 つの部門から構成されています。そして、それぞれの部門において、①教育実習を軸に、1 年次から 4 年次までの 4 か年を見通した実地教育の推進、②教職志望学生への支援（日常の支援・教採への支援・相談活動等）や現職教員への支援（研究交流会・講演会の開催・相談活動等）など教職支援の推進、③附属学校園や県市教育関係機関との連携・協働による教育開発に関する研究の推進を行っています。

本センターのメンバーは、センター長、2 名の専任教員と 8 名の兼任教員、教務職員（1 名）、事務補佐員（2 名）、さらに 3 名の客員教授で構成されています。

以下に平成 28 年度に実施した主な活動を紹介します。

○「公開講演会」と「研究交流会」の開催

公開講演会は、教育実践、教育臨床の研究実践の分野で全国的に活躍されている先生を講師にお迎えし、教育現場が抱える問題や現代的な課題に関するテーマで講演いただき、教育委員会並びに県内の諸学校にも案内を出し広く公開しております。平成 28 年度は下記の「公開講演会」と「研究交流会」・「道徳ラボ研修会」を実施しました。

「研究交流会・第 1 回公開講演会」

平成 28 年 8 月 6 日（土）「香川大学教育学部と香川県教育委員会との連携を基盤に」

【ワークショップ】 A 「道徳科を要とした道徳教育の改善充実に向けて」

B 「主体的・協働的な学びを促すアクティブ・ラーニング」

C 「通常の学級に在籍する発達障害等のある子どもの支援に向けて」

【講演】前高知大学教育学部附属教育実践総合センター准教授 田邊 重任 氏

「第 2 回公開講演会・道徳ラボ研修会」

平成 28 年 12 月 10 日（土）「道徳教育の学びの場をつなぐ相互補完研修プログラムの開発

～『かがわ道徳ラボ』を核として～」

【シンポジウム】

独立行政法人教員研修センター東京事務所 主任指導主事 堀田 竜次 先生

京都産業大学教授、元文部科学省教科調査官 柴原 弘志 先生

秋田公立美術大学教授、小学校学習指導要領解説協力者 毛内 嘉威 先生

【講演】昭和女子大学教授、元文部科学省教科調査官 押谷 由夫 先生



○教材・資料の収集・管理・共同利用

主に教育学部や附属学校園の教員，大学院生や大学生による教育や研究利用のために，①研究資料（他大学からの研究紀要や香川県教育委員会等の関連出版物），教材（教科書及び指導書）等の収集・管理，②教材，機器等の共同利用のための物品などの整備，③特殊装置の有効利用のための整備，④学習コンテンツの開発・収集，⑤情報メディア・I C T機器の活用に向けた教員養成・研修の支援，⑥デジタル教科書の活用のための整備等を行っています。

○研究活動の報告と広報活動

研究活動の報告については，まず『香川大学教育実践総合研究』を年間2回編集発行しています。また，「教育実践集中講座資料集」（センター客員教員が主に学生向けに実施する講座の資料をまとめたもの）を発行しています。

広報活動としては，「センターニュース」を年2回発行しています。また，教師教育用映像教材の閲覧・貸出サービスを実施しています。

センターのHP（<http://www.ed.kagawa-u.ac.jp/~j-cen/>）にて，「センターニュース」のバックナンバーの閲覧が可能です。また，ここに示した以外のセンター事業に関しての報告も掲載しております。ぜひご覧ください。

○学部，大学院教育の担当

センター専任教員は学部及び大学院の授業を担当しています。

○教育委員会，学校等の地域の諸機関への協力

地域に開かれた施設として，県や市町のエド育委員会からの講演等の依頼や，地域の学校からの現職教育等への依頼を引き受けるとともに，香川県教育委員会の教員研修や香川県教育センター及び高松市総合教育センターの研究事業等に協力しています。



【教職大学院のご紹介】

■ 2年目を迎えた教職大学院

昨年4月に発足した香川大学教職大学院ですが、第1期生15名のうち、短期履修学生制度を利用して入学した現職教員12名が密度の濃い1年間を過ごして、この3月にめでたく修了しました。教職大学院では修了にあたって、従来の修士論文ではなく、理論と実践の往還にもとづく実践研究報告書を提出することになっています。修了生12名の実践研究のテーマを下表に載せましたが、学級経営や授業、あるいは、本学の特色である「通常の学級で特別な教育的ニーズのある児童生徒への支援」など、いずれも実践的な教育課題であることが分かります。それぞれのテーマについて院生は、大学での授業等を通して得た理論を実践に適用して検証したり、逆に実践の積み重ねから理論の修正を試みたりすることになります。その仲介の役割を果たしたのが「教職実践研究Ⅰ・Ⅱ」という授業と毎週の「実習」でした。そして、その研究成果は、3月の教職実践研究フォーラムにおいて、置籍校の校長先生や同僚の先生方、県市町教育委員会の方々、他大学の教職大学院の先生方など、県内外から来られた84名の参加者の前で発表されました。



教職実践研究フォーラムでの発表の様子

平成28年度修了生の実践研究テーマ一覧

学校力開発コース

- ・ 好ましい人間関係を育む学級経営の組織的な取り組み – アセスを活用した適切な児童理解と支援 –
- ・ 通常の学級にいる支援の必要な生徒への対応 – 組織的な支援を行うための校内体制の整備のあり方 –
- ・ 小学校における協働意識の向上に関する実践研究 – 校内研究授業討議に着目して –

授業力開発コース

- ・ 中学校における「英語で授業」実践研究 – 授業改善の視点を探る –
- ・ 「教えて考えさせる授業」と「問い返し発問」に注目した授業改善 – 算数科「概数・見積もり」の実践を通して –
- ・ 主体的な読み手を育てる国語科の実践的研究 – 説明的文章の授業を通して –
- ・ 体育の本質に迫り子どもを学びの主体者へと変える指導法開発 – 知識と技能をつなぐ思考の再構成と見通しを持つための振り返りの在り方 –
- ・ 道徳科の特質を生かした学習指導の展開 – 主人公の心の揺れに焦点をあてた役割演技の実践 –

特別支援教育コーディネーターコース

- ・ 平仮名の読み書きに困難のある小学校低学年児童を対象とした音韻意識を高める学習支援
- ・ 中学校の通級指導教室におけるアセスメントに基づく支援の重要性
- ・ 読み書きに困難を抱えるADHD児に対する学習の意欲化を図る支援の検討
- ・ 通常の学級で支援を要する児童の学習参加行動を引き出す支援の検討

■関係機関との連携：1年目の取組

教職大学院では、高度な力量を備えた教員を養成するとともに、「学び続ける教員」を支援するために、また、学校現場の課題やニーズに応えるために学外の関係機関と連携した取組を行います。昨年度はつぎのような取組を行いました。

- (1)教職実践研究交流会の開催：8月に第1回教職実践研究交流会を開催し、大学院生や現職教員など教育関係者と実践について情報交換しながら交流を深めました。
- (2)「かがわ道徳ラボ」の開設：小学校では2018年度、中学校では2019年度から始まる道徳の教科化に備えて、独立行政法人教員研修センターの「平成28年度教員の資質向上のための研修プログラム開発事業」に採択された「道徳教育の学びの場をつなぐ相互補完研修プログラムの開発 ～『かがわ道徳ラボ』を核として～」を香川県教育センターとの連携のもと推進しました。
- (3)香川の教育づくり発表会への参加：12月に開催された同発表会の会場の一角に新しく教職大学院のブースを設けていただき、成果展示と広報を行いました。
- (4)香川県教育センター研究発表会への参加：2月に開催された同研究発表会に院生全員が参加し、最新の知見や情報を学びました。

■2年目継続の取組と新規の取組

第1期生のうち2年目の学部卒の3名と第2期生13名の計16名で本年度の教職大学院は活動を開始しました。また、全国的にみると、本年度新たに7大学に教職大学院が開設された結果、ほぼすべての都道府県に計52の教職大学院が設置されました。下記のように、本年度も継続する取組のほか新たに始まる取組もあります。



平成29年度在籍の大学院生と教員

- (1)教職実践研究交流会の開催：本年度も8月に開催する予定です。本年度から何人かの修了生がその後の実践研究の成果を発表する予定です。
- (2)「かがわ道徳ラボ」の継続：引き続き、独立行政法人教職員支援機構の「平成29年度教員の資質向上のための研修プログラム開発事業」に採択された「道徳科全面实施を支援する研修プログラムの開発 ～『かがわ道徳ラボ』を核として～」を推進していく予定です。
- (3)フォローアップ・プログラムの開始：短期履修学生制度を利用した修了生は、大学院での学びを補完するため、修了後も勤務校での校内研修や上記の教職実践研究交流会等への参加を義務づけるフォローアップ・プログラムを受講することになっています。
- (3)香川の教育づくり発表会への参加：フォローアップ・プログラムの一環として、本年度から修了生がその後の実践研究の成果を発表させていただく予定です。
- (4)県教育センター研究発表会への参加：フォローアップ・プログラムの一環として参加予定です。

【学部だより】

◇平成 29 年度行事予定

- | | |
|----------------|---------------------------------|
| H 29. 4. 1 (土) | 第 1 学期開始 |
| 4. 3 (月) | 入学式, 新入生ガイダンス (5 日まで) |
| 4. 4 (火) | 全学共通科目ガイダンス・各種ガイダンス |
| 4. 5 (水) | 新入生修学相談 (7 日まで), 新入留学生ガイダンス |
| 4. 7 (金) | 新入生健康診断 |
| 4. 10 (月) | 授業開始 (全学共通科目, 教育学部開設科目) |
| 7. 28 (金) | 第 1 学期定期試験開始 (全学共通科目, 教育学部開設科目) |
| 8. 3 (木) | 第 1 学期定期試験終了 (全学共通科目, 教育学部開設科目) |
| 8. 4 (金) | 授業・定期試験予備週間 (10 日まで) |
| 8. 6 (日) | 夏季休業開始 |
| 8. 8 (火) | 大学説明会 (オープン・キャンパス) |
| 9. 30 (土) | 夏季休業終了・第 1 学期終了 |
| 10. 1 (日) | 第 2 学期開始 大学記念日 |
| 10. 2 (月) | 授業開始 (全学共通科目, 教育学部開設科目) |
| 10. 15 (日) | 「未来からの留学生」教育学部オープン・キャンパス |
| 11. 3 (金) | 大学祭前夜祭 (臨時休業) |
| 11. 4 (土) | 大学祭 (5 日まで) |
| 12. 25 (月) | 冬季休業開始 |
| H 30. 1. 7 (日) | 冬季休業終了 |
| 1. 12 (金) | 臨時休業日 |
| 1. 13 (土) | 大学入試センター試験 (14 日まで) |
| 2. 6 (火) | 第 2 学期定期試験開始 (全学共通科目, 教育学部開設科目) |
| 2. 13 (火) | 第 2 学期定期試験終了 (全学共通科目, 教育学部開設科目) |
| 2. 14 (水) | 授業・定期試験予備週間 (20 日まで) |
| 2. 25 (日) | 入学者選抜試験「個別学力試験」(前期日程) |
| 3. 11 (日) | 春季休業開始 |
| 3. 12 (月) | 入学者選抜試験「個別学力試験」(後期日程) |
| 3. 24 (土) | 卒業式・修了式「卒業生を送る会」 |
| 3. 31 (土) | 春季休業終了・第 2 学期終了 |

◇平成 29 年度教育実習計画

免許別実習校・年次			週	実 習 期 間	
○	主免小学校	3 年次	5	高松小学校 坂出小学校	平成 29 年 8 月 29 日 (火) ～ 9 月 29 日 (金) 平成 29 年 9 月 1 日 (金) ～ 10 月 5 日 (水)
○	基礎免小学校	3 年次	3	高松小学校 坂出小学校	平成 29 年 8 月 29 日 (火) ～ 9 月 15 日 (金) 平成 29 年 9 月 1 日 (金) ～ 9 月 21 日 (木)
◎	主免中学校	3 年次	4	高松中学校 坂出中学校	平成 29 年 8 月 30 日 (水) ～ 9 月 26 日 (火) 平成 29 年 9 月 4 日 (月) ～ 9 月 29 日 (金)
☆	主免特別支援学校	4 年次 3 年次	4		平成 29 年 5 月 24 日 (水) ～ 6 月 6 日 (火) 平成 29 年 10 月 11 日 (水) ～ 10 月 24 日 (火)
△	主免幼稚園	3 年次	4		平成 29 年 9 月 1 日 (金) ～ 9 月 28 日 (木)
◎	人間発達環境課程	3 年次	4	高松中学校 坂出中学校	平成 29 年 8 月 30 日 (水) ～ 9 月 26 日 (火) 平成 29 年 9 月 4 日 (月) ～ 9 月 29 日 (金)
○	副免小学校	4 年次	2	高松小学校 坂出小学校	平成 29 年 8 月 29 日 (火) ～ 9 月 8 日 (金) 平成 29 年 9 月 1 日 (金) ～ 9 月 14 日 (木)
◎	副免中学校	4 年次	2	高松中学校 坂出中学校	平成 29 年 8 月 30 日 (水) ～ 9 月 12 日 (火) 平成 29 年 9 月 4 日 (月) ～ 9 月 15 日 (金)
☆	副免特別支援学校	4 年次	2		平成 29 年 5 月 24 日 (水) ～ 6 月 6 日 (火) 平成 29 年 9 月 21 日 (木) ～ 10 月 4 日 (水)
△	副免幼稚園	4 年次	2		平成 29 年 9 月 1 日 (金) ～ 9 月 14 日 (木)

○：附属小学校 ◎：附属中学校 ☆：附属特別支援学校 △：附属幼稚園 における実習を示す。

◇平成 29 年度特別教育実習（公立学校実習）計画

実習校・年次		週	地区	実 習 期 間	
公立小学校	4 年次	2	高松	一宮小学校	平成 29 年 5 月 10 日 (水) ～ 5 月 23 日 (火)
				多肥小学校	平成 29 年 5 月 15 日 (月) ～ 5 月 26 日 (金)
				高松第一小学校	平成 29 年 5 月 22 日 (月) ～ 6 月 2 日 (金)
				香西小学校	平成 29 年 5 月 29 日 (月) ～ 6 月 9 日 (金)
				仏生山小学校	平成 29 年 6 月 5 日 (月) ～ 6 月 16 日 (金)
				弦打小学校	平成 29 年 6 月 5 日 (月) ～ 6 月 16 日 (金)
		坂出	東部小学校	平成 29 年 5 月 8 日 (月) ～ 5 月 19 日 (金)	
			坂出小学校	平成 29 年 5 月 8 日 (月) ～ 5 月 19 日 (金)	
			金山小学校	平成 29 年 5 月 15 日 (月) ～ 5 月 26 日 (金)	
公立中学校	4 年次	1	高松	桜町中学校	平成 29 年 5 月 22 日 (月) ～ 5 月 26 日 (金)
			坂出	坂出中学校	平成 29 年 5 月 23 日 (火) ～ 5 月 29 日 (月)
県立高等学校	4 年次	1 又 は 2	高松	高松北高校	平成 29 年 6 月 5 日 (月) ～ 6 月 9 日 (金)
			坂出	坂 出 高 校	平成 29 年 5 月 29 日 (月) ～ 6 月 9 日 (金)

◇学校教育教員養成課程の活動紹介

1 年次の学び 大学入門ゼミ、教職概論

■郷土の特色を生かした学び ～1 年次の実地教育「二十四の瞳との出会い学習」～

教員養成課程 1 年次の学生は、前期に全学共通科目（必修科目）の「大学入門ゼミ」（初年次教育）を、後期には「教職概論」を必ず履修することになっています。これらの授業では、1 年次生全体での講義のみならず、7 クラスの編成を基にしたクラス別演習、2 クラス・2 クラス・3 クラスに分けたコース別演習など、多様な学習集団の規模を組み合わせ、授業を実施しています。

平成 26 年度より毎年実施している小豆島での一日研修は、郷土の特色を生かした「二十四の瞳との出会い学習」として位置づけ、毎年改善実施を行っています。平成 29 年度においても、全員が単行本「二十四の瞳」を読み（後日「読んだかな？クイズ」を実施）、水曜日午後の特設時間帯で、1954 年（昭和 29 年）に公開された高峰秀子主演のモノクロ映画「二十四の瞳」を 156 分にわたり鑑賞し、国語科の先生から解説をいただくなどの事前学習を行った上で、4 月下旬、小豆島一日研修に臨みました。当日は、岬の分教場・二十四の瞳映画村・壺井栄文学館を訪ね、映画村内では壺井栄文学館 館長様より、壺井栄の生き方や二十四の瞳に込められた思い・願いなどについてご講話もいただきました。さらに、小豆島の風土や文化を感じられる「流しそうめん」の体験や、オリーブ公園、中山地区の棚田群と瀬戸内国際芸術祭の作品、エンジェルロードでの貴重な時間も、学生たちにとって良い思い出となったようです。この「二十四の瞳との出会い学習」が、教育学部に入学し、教師を目指す上での貴重な一歩となることを願っています。



【小豆島一日研修のひとコマ（平成 29 年 4 月 29・30 日実施）】

■アカデミック・リテラシー習得の場としての「大学入門ゼミ」

高校から大学への進学において、両者における学び方の差異に大きな戸惑いを感じる学生も少なからずいると思われます。「大学入門ゼミ」は、教育学部だけでなく全学部共通の大学教育カリキュラムであり、香川大学の学生にとって必要なアカデミック・リテラシーを習得する場として位置づけられています。具体的には、4 年間の学びの基盤として、{情報整理の方法、日本語技法、レポートの書き方、プレゼンテーションの方法}の 4 つの内容について、全学部共通に学んでいます（これらの内容を「共通コンテンツ」と呼んでいます）。

共通コンテンツの授業を終えた後、学生からは「高校と大学の違いを実感できた。レポートとプレゼンテーションは、大学に来て初めてやったのでとても助かった。」「レポートの書き方についての講義を受け、大学入学前に不安であったレポートをどのように書いていくのか、…（中略）…理解することができ良かったと思います。」など、高校生までとは異なる“大学生としての学び方”のスキルアップの基礎を培うことができたと思われます。

加えて学生からは、「プレゼンテーションの方法を学ぶ際に、発表してみたのがよかった。」「実際にプレゼンを実践できてよりわかりやすくプレゼンをする方法がわかってよかった。」などの感想も複数寄せられました。共通コンテンツの内容を、ただ一斉講義により伝えるだけでなく、「事例について実際に考えてみる」「ペアやグループごとに話し合う・伝え合う」といった演習形式を、各担当教員が工夫して取り入れ、授業を行っています。

■学校園について「知り」→「気づき」→「考えを深める」演習プログラム

前期「大学入門ゼミ」では、2年次の「教育実践プレ演習」や3年次の「教育実習」などへの入り口として、附属学校園を訪問します。これによって、教育実践について関心を持ち、学生一人ひとりが、自分が目指す教師像の具体的イメージを創ることをねらいとしています。また後期「教職概論」では、幼稚園・小学校・中学校と、自分が教師として目指したい校種に合わせた選択型の講義・演習内容を一部導入するなど、1年次の実地教育のテーマである「学校理解」の充実に向けた改善を図っています。

香川大学教育学部では、教員を目指す学生として必要な「5つの資質能力」を設定し、教員養成に力を入れています。5つの資質能力とは、**「教職への使命感、対人能力、子ども理解、指導力、探究心」**であり、これらの資質能力については、卒業までの4年間、実地教育カリキュラムに基づく科目の節目節目に、『教師になるための学びの計画と履歴』という冊子に、4年間にわたり継続的に記入していくことで、自己の現状と課題を見つめ、授業・演習・実習に取り組み、自身の成長を確認します。このような、教職という将来の夢の実現に向けた**「計画づくり—実践—評価—課題の明確化」**のサイクルを積み重ねていく第一歩として、1年次生は「学校理解」の演習プログラムに取り組んでいます。



【附属学校園参観と小グループ演習活動】

◇人間発達環境課程の活動紹介

発達臨床コース

発達臨床コースでは、福祉マインド、臨床マインドを幅広く学び、実践的な知にまで高めるために、2、3年次における多岐にわたる臨床心理・福祉施設での実習に重きをおいて学んでおります。

2年生においては、福祉実習を中心として、保育園、高齢者施設、知的障害者施設などへ。そして、3年生になれば、心理的な課題を抱えた子どもたちへの対応を考える場として、心身障害者施設、児童養護施設、適応指導教室（不登校のための教室）等で実習を行います。

臨床心理学に関する授業、福祉に関する授業を通して臨床心理・福祉の基本的知識を得ることに合わせて、こうした実習と臨床心理演習や臨床心理学実習の授業を通して、知識の経験化、実践知の育成に努めています。

臨床心理学に関する授業、福祉に関する授業を通して臨床心理・福祉の基本的知識を得ることに合わせて、こうした実習と臨床心理演習や臨床心理学実習の授業を通して、知識の経験化、実践知の育成に努めています。

それらの授業の中で、実習先の施設についての学習をグループごとに行ったり、発表したりして実践に備えます。施設実習は、夏期を中心に実習する施設もあれば、定期的な日程で一年を通して行う場合もあります。

2年生における施設実習は、ほとんどの学生にとって初めての経験であり、困難さを感じることもあります。しかし、実際の経験は何ものにも代え難い経験であり、失敗も多く厳しい指導もありますが、学ぶことも多いものです。実習が修了した後に、施設実習に関するミーティングを行ったり、全体の発表会でこれからの経験を発表したりして、知識を共有します。

3年生になれば、2年生の経験を元に、臨床心理の施設にトライします。実習時間も45時間と長くなりますが、その方が実際の現場の理解につながるのです。この間に、2年生での失敗や成功を踏まえて、もっと学びたいという意欲や自信も得られます。施設の中で生きる人たちとのふれあいの時間によって、人間の心の問題を考える機会となり、ひいては自分の問題について考える契機にもなります。

実習を通じた体験が、卒業論文のテーマに影響し、その後の進路にもつながったり、大学院への進学を目指す学生も数多くいます。また実習の後にも、実習先の施設でのボランティアを継続し、長期にわたり子どもたちや高齢者の方々と関わる学生もいます。

発達臨床コースでは、福祉と臨床の両面からこうした学習を行っています。そして、理論だけでなく、実践を伴った学習や施設実習を通して、現代社会を担っていくことができる、生きた知識を備えた学生を育てることを目指しているのです。



人間環境教育コース

人は、自然、様々な共同体（家族、学校、地域、国家等々、広く社会）、有形無形の文化（伝統、歴史、宗教、言語等々）など、さまざまな環境の中で生きています。人間環境教育コースでは、それら多様な環境と人間との関わりを、生涯学習の視点から実践的に研究し、必要な対策や、豊かで新たな環境づくりを提案する人材を養成することを目標としています。

そのためには、環境にかかわる様々な具体的問題を知り、それに取り組むための学問的知識を身につけ、生涯にわたって課題の解決を見出す能力を培っていくことが必要であり、カリキュラムの特徴として、人文・社会・自然・芸術分野に至る多様な領域の講義や演習に加えて、次のような実践系の授業科目を柱として設定しています。

- (1) 学生自らテーマを設定して調査研究する演習科目
- (2) 施設や機関を訪問して調査し、研修等で実践的な知識や経験を得る実践研究科目
- (3) 環境に関わる問題をどう学問的に取り組むかを広い視野から学ぶため教員と学生が一体となって共同研究を行うプロジェクト型演習

特に(3)はコースのカリキュラムの中心となっています。現在、「環境論・対策」班、「環境創造・イベント（遊びと人間）」班、「人間研究」班、「メディア環境」班の4つからなり、7名の教員と、3年生以上の34名の学生は、それぞれのプロジェクト班に所属して、共同で研究活動を行っています。



コースの活動としては、2年生はおもに瀬戸内の離島をフィールドにして、地域の生活環境や生活課題に関する調査実習を行います。これは2004年に始まった「豊島プロジェクト」に端を発しています。離島は自然の美しい地域であるとともに、過疎高齢化の先進地域でもあります。その現場に実際に足を運び、島の人々からの聞き取りを通して生きた現実を学ぶことを目的としています。具体的には、豊島エコツアーへの参加や、豊島事件（有害産業廃棄物不法投棄事件）からの地域の再生、離島の教育事情、瀬戸内国際芸術祭が島の生活に与えた影響などについて聞き取りを重ねてきました。2006年度からは「夜間開放グラウンド」という豊島の地域行事にも参加し、また豊島の公民館祭りにも協力して、活動を広げてきています。

3年生では、社会研修として、高松市観光課、高松市コミュニティセンター、高松市男女共同参画センター、岡山放送、さぬきこどもの国、高松地方気象台、高松北警察署など、様々な公共的活動を行っている施設で研修し、公共的な社会活動の意義を学び自分の将来について考える機会となっています。

4年生はそれまでに学んできたことを基礎に、各プロジェクト班で活動するとともに、今までの学びの総決算として、各自テーマを設定し、多様なテーマの卒業研究を行います。昨年度のプロジェクト活動では、「環境論・対策」班は合宿研修を実施し、フィールド調査を行っています。「環境創造・イベント」班は、毎年イベント等を企画実施して昨年度は親子料理教室を企画開催しました。

この他に、コースの行事として学生が中心となって企画・立案・運営していくものがあります。



オープンキャンパス（大学説明会）では3年生が中心になり、各プロジェクト班の内容を紹介しています。また「未来からの留学生」では2年生による企画を実施し、参加した子どもたちから好評を得ています。学生にとっては、これらの行事の企画実行は、自ら思考して課題を発見し、その問題の解決を見出していく能力を育成するための重要な機会となっています。なお、コースの概要や各プロジェク

トの特色などは、コースのホームページに掲載しています。

(<http://www.ed.kagawa-u.ac.jp/~humanity/index.html>)

卒業後の進路は、公務員、教員、一般企業、大学院進学など多様となっています。

国際理解教育コース

以下、特色のある活動内容について説明します。

国際理解教育実践研究Ⅰは、交換留学生との協働作業を含むユニークな授業です。国際理解教育の基礎について学ぶとともに、交換留学生とグループを作り、独自の研究テーマを設定して、調査研究を行い、中間・最終発表を経て、共同の最終レポートを作成します。その一連の作業の中で、国際理解教育コースの学生も留学生も異文化理解と異文化間コミュニケーションの実際を学ぶことになります。

国際理解教育実践研究Ⅱは、2年次までに学んだ国際理解教育や多文化共生についての知識をインターンシップによる実践を通して身につけます。2年次の国際理解教育実践研究Ⅰが座学を中心とした学びであるのに対し、学外の機関で研修を行う点に特徴があります。

平成28年度は、過年度生も含め18名の学生がこの実践研究Ⅱの研修を行いました。内訳は以下のとおりです。香川県知事公室国際課（5名）（小中学校の外国語教育に関わるALTのオリエンテーションおよび県内の外国語指導に関わる教員が参加する外国語指導補助等指導力向上研修会の補助）、香川県国際交流協会（6名）（一般市民を対象とした地球市民のための講座・交流シリーズや国際理解講座、かがわ国際フェスタ、外国にルーツのある児童生徒のための子どもにほんご教室、高校生を対象としたアイパルJICA高校生カレッジ、県内在住の外国人およびボランティアを対象とした外国人のための防災訓練の補助）、東かがわ市国際交流協会（2名）（東かがわ市で就職・生活している外国人を対象とした日本語指導教室の補助）、国際協力機構JICA四国（2名）（四国の高校生が参加する国際協力実体験プログラムの補助）、公立小学校（2名）（外国にルーツのある児童の学習や教材作成補助等）、海外研修（1名）（アメリカ・コロラド州立大学への留学）。

これらの活動をする中で、学生はこれまで学んだ国際理解教育や多文化共生に関わる知識と実践を結びつける機会を得ることができました。言葉や文化の異なる人と接するときに何が起こるかということを肌で感じることで、改めて自分の国の文化や言葉を見直すきっかけにもなり、実りあるインターンシップとなりました。



◇教員の研究活動紹介

私の研究テーマ

学校教育教員養成課程 幼児教育コース 松井 剛太

私の研究テーマは、幼児期における障害のある子どもの支援です。現在進めている研究は次のとおりです。

1. 障害のある子どもの保育所・幼稚園における支援：Activity-based approach を中心に
2. 障害のある子どもの就学前施設から小学校への接続に関する国際比較調査
3. 障害のある子どもをもつ保護者における社会的支援に関する国際比較研究

これらに共通しているのは、子どもにとって「あたりまえ」の生活や遊びを基盤にしたうえで支援のあり方を探究するというものです。そのため、「障害のある子ども」としてはいますが、すべての子どもが嬉しい生活・保育環境を範疇にしています。インクルーシブな保育を実現することも大きな課題です。

Activity-based approach を開発した Diane Bricker 博士の言葉です。

乳幼児期の子どもにとってあたりまえの生活こそが心身の発達と学習の深化を約束する。あたりまえの生活とは何か。それは普通の社会や文化の中で、子どもであれば誰もが経験することが含まれているものである。

私がまだ大学院生だった頃、博士と出会い、指導を受ける機会を得ました。障害のある子どもの支援では、「特別な場で特別な方法を用いて行なわなければ発達が保障できない」というのは、多くの事例や研究からも批判されていることです。その子にとって、あたりまえの生活の中で、その子自身が自ら進んで経験を深めていく中で生まれる学びを支援につなげていく、これは障害の有無にかかわらず、すべての子どもにとって大切なことでもあると思います。

教育学部では「発達支援」を教員養成の柱に位置付けています。これらの研究が、保育者や教育者をめざす学生に寄与するものとなるよう、研究と教育に邁進したいと思います。

私の研究について

学校教育教員養成課程 理科教育講座 小森 博文

私の専門は生化学（生物化学）です。化学というと、無機化学と有機化学などの分野は有名ですが、“生化学”はあまり聞いたことがないという人が多いようです。高校化学においても天然高分子の説明が少しあるだけです。新しい化学物質を合成することが化学の王道であると考えている人もいるようで、何も生み出さない（合成することが目的ではない）生化学は、とても肩身の狭い思いをすることがあります。生化学は、研究の対象が“生物”であり、それを“化学”の言葉で理解しようとしています。私たちの体の中では、目には見えない小さな物質（分子）がたくさんはたらいています。エネルギーの源となる糖類や遺伝情報を担う核酸、そしてタンパク質などです。生命活動は、これらの分子の化学反応によって駆動しています。なかでもタンパク質は化学的な性質が多様で、いろいろなはたらきをします。ものを見たり、食べたり、歩いたりするのもすべてタンパク質のはたらきです。タンパク質が我々の命を支えていると言っても過言ではありません。特に、化学反応の手助けをするタンパク質（酵素）はとても重要です。酵素は、人工的にはとても真似のできない優れた能力をもっていますので、タンパク質工学によって改良し、産業応用しようとする研究が進んでいます。タンパク質は、何億年もかけてその機能を進化させてきました。私たちは、新しい化学物質を合成することはできませんが、生物がもつ素晴らしい力を利用するために研究をしています。

現在、科学研究費補助金の支援によって研究課題「ヒスタミン合成酵素の分子機構解明」を進めています。体内でヒスタミンがつくられる仕組みを調べる研究です。ヒスタミンは、アレルギー反応の仲介物質として有名ですが、胃酸分泌の調整や脳内神経伝達物質としてもはたらくなど、生理現象を調節するために無くてはならない重要なシグナル伝達物質です。一昨年度からスペインの大学と共同研究で、新規阻害剤の解析をしています。私の研究室に配属となった4年生とともに、卒業研究の一環として取り組んできましたが、最近面白い結果がでできました。阻害剤と酵素の結合の様子だけではなく、酵素のはたらく仕組みについても予想外の発見ができました。大学の教員として一番楽しい瞬間です。卒研究生は、研究者を目指している訳ではありませんが、将来、教員として子供たちに理科の面白さを伝えるときにも、この経験が生かされることを期待しています。

中近世史・経済史・環境史研究と香川大学での経験

人間発達環境課程 人間環境教育コース 村山 聡



東アジア環境史協会会長時の筆者
(同協会主催の国際学会 EAEH 2015
の懇親会会場で)
2015年10月24日(香川県高松市、
J. Donald Hughes氏撮影)

ドイツ中近世史・経済史研究を専門としながら、香川大学に異動してから、日本近世の歴史人口学・家族史・経済史研究に一步足を踏み込んで、すでに25年近い歳月が経過しました。日本の近世史とヨーロッパの中近世史を同時並行で研究しつつ、1998年4月の香川大学教育学部における人間発達環境課程の設置以降は、学生と共に歩み、環境史研究にも着手することになりました。

私は、慶應義塾大学経済学部を卒業後、同大学院の経済学研究科経済史専攻に入り、同博士課程3年の1983年8月からドイツに留学し、7年間をかけて、ドイツ・ヘッセン州・ギーゼン大学で歴史学系の博士号を取得しました。哲学部(中近世史専攻が含まれる)では、日本の社会科学系の大学と大学院で取得した単位は認められず、博士論文を提出す

るためには、歴史学系の授業を受け、博士論文提出のための必要単位をすべて整える必要がありました。その結果、博士論文の史料研究と論文執筆とともに、ドイツ史に関しては、中世史、近世史、近代史の演習単位をすべて修得することになりました。歴史学専攻に入っていない学生用の初級の演習から博士学位取得者と博士学位申請者のみの最上級の演習まですべて同時に出席していたこともあり、7年間のうち、この準備段階の最初の3年間足らずは、滅多に経験できない実に素晴らしい時間を過ごすことができました。

今から考えるとドイツの大学の歴史学専攻の演習というのは、日本の大学の卒業研究にほぼ匹敵する量と質を求められていたように思います。中世史では、ドイツ語特有の帝国・王国に関する細かな議論を原典史料にあたって報告をする必要がありましたし、近代史では、19世紀の植民地政策や異国からのレポートの詳細を新聞記事やニュースレターを分析する演習でも報告をしました。近世史に関して言えば、ルターの住民救済のための共同献金簿に関する詳細な分析、第二次宗教改革あるいは信条化の時代の多数の演習がありました。さすがに近世史が主専門であることもあり、単位とは関係なく、指導教授であるハインツ・シリング氏の演習にはすべて出席していましたので、彼が論文を書きながら演習を行い、講義がそのまま著作になる過程も体験できました。

このドイツでの博士号取得過程の体験を経た後、慶應義塾大学の経済学部でヨーロッパ経済史を教えるために採用され、最初の講義は、「地域社会経済史」と題し、ヨーロッパを主な舞台としていました。その講義がその後の講義や演習の土台になっています。高松に来てからは近世日本経済史においても専門として通用する論文を発表し、多くの国際学会でも報告をして来ましたので、その内容も授業に組み込めるようになりました。

この二つの専門分野に加えて、人間発達環境コースそして人間発達環境課程が設立されてからは、新たに「環境」がキーワードに加わり、学生と共に豊島の産廃の視察をし、自然環境に関わる様々な環境問題を議論するようになりました。人間発達環境課程の人間環境教育コースでは、人文系、社会科学系、自然科学系の多様な出自である教員が一堂に会し、複数の学生と共に、纏まりを持った共通テーマで一緒に討議するプロジェクト制の演習がありました。自分自身も多く学ぶ機会となり、それが第3の専門とも言える「環境史」研究に繋がりで、この分野では東アジア環境史協会という国際学会の学会長を務めるようになりました。

決してドイツの大学教授のように「教授」する最高峰に登れた訳でもなく、内心忸怩たるものがあります。しかし、学生と共に歩むことのできた香川大学そして教育学部さらに人間発達環境課程の先生方そして現在の学生並びに巣立って行った多くの学生たちから実に多くを学ぶことができました。

この場を借りて、学生を見守って来て頂いた、そして見守って頂いている保護者の方々に心より感謝を申し上げたいと思います。定年までの残り数年、微力ながら引き続き努力したいと考えています。

私の研究テーマ

教職大学院（授業力開発コース） 齋藤 嘉則



私は、平成 28 年 4 月、教育学研究科高度教職実践専攻（教職大学院）の実務家教員のひとりとして本学に着任いたしました。私の略歴を申し上げますと、地方国立大学の教員養成学部を卒業してすぐに太平洋沿岸に浮かぶ離島の中学校に赴任したのが今から 36 年前のことです。それから本学に着任するまで、公立中学校教諭、教頭、校長の職を務め、その間、教育委員会指導主事、教育指導課長、宮城教育大学教職大学院准教授、文部科学省初等中等教育局教科書調査官（外国語担当）と、職を転々としてまいりました。

そのなかでも私の研究テーマにかかわることで、今でも忘れることができないことがふたつあります。ひとつ目は、離島の中学校に赴任したばかりの年の 5 月のことでした。教育事務所の指導主事訪問があり、私は自分の教科である英語科の授業をすることとなりましたが、当時、私は、「授業」＝「説明」と誤解しておりました。授業後の検討会、冒頭、指導主事の先生から、「今日の授業で生徒は何が分かり何を身につけたのでしょうか」という問いに対して、私は得意になってその時間に自分が生徒に「説明」して理解させたと思い込んでいる文法事項について蕩々と述べました。すると今度は、「生徒が理解したことを、齋藤先生は授業のどの場面で確認しましたか。また、これから確認するのですか。確認するとしたらどういう手立てで確認するのですか」と問うてきたのです。不覚にもその間の意味が当時の私にはよく分かりませんでした。結局、指導主事の先生は、「教師が説明したからといって、教師が期待したように生徒が理解してくれるとは限らない」、さらに、「今日の授業は、『授業』だったのですか。それとも齋藤先生の『独演会』だったのではないですか」ということをお話しされていたのだと後々になってやっと分かったしだいでした。後年、十数年後になりますが、この指導主事の先生とは、旧文部省の道德教育に関する研究指定校の校長と、その学校の研究主任（こちらでは「現教主任」にあたると思います）という立場で再会することになります。

ふたつ目は、私が 30 歳代の時に 2 度ほど 2 つの学校で旧文部省研究指定校の研究主任を務めたことです。まず、研究指定の趣旨があり、それに沿ってそれぞれの学校や地域の実態に応じて研究計画を立てて実践的な研究を実施して、2 年目か 3 年目の秋には公開研究会を開催するということが求められました。研究の中心は 2 校とも当時の「道德の時間」の指導改善にありました。道德授業をどう組み立てれば、生徒が額に汗して考える授業、議論する授業になるのか、との問題意識をもって研究に取り組みました。そして、その結果、校長を中心に教職員一同、生徒たちも一緒になって皆で力を合わせて、学校としてひとつのことをやり遂げた、すなわち皆で額に汗して考える道德の授業を創り上げることができたと思いました。その時の充実感は何物にも代えがたい経験でした。

それ以後、私の問は、「授業の指導過程をどの様に構成するか」ということにあります。これは、教科においても「道德の時間」（教科化され「特別の教科 道德」となりました）、学級活動においても同様です。生徒が額に汗して考える、そしてその考えを吟味、検討して、どの考えが一番よいのか判断する。さらに、その考えを人に分かり易いように表現する、「言語化」することでさらに自分の考えを確かなものにしていく、という過程を「授業」の「教授過程」または「学習過程」にどう組み込んでいくことができるのか、ということが私の基本的、根本的な問であり、現在、研究している中心的なテーマとなっています。

近年、2 校の研究主任、学校管理職、教育行政（地方教育委員会及び文部科学省）の職も経験したことから、先程まで縷々述べてきました「授業」が実施可能な環境的な条件とは如何なるものか、所謂、学校カリキュラムの編成と改善、学年、学校の教育活動や指導運営の在り方など、「授業」周辺の条件の整備についても興味や関心が向いている今日この頃です。

◇交流教員の活動紹介

香川県教育委員会との連携により、公立学校の現職教員3名が大学教員(准教授)となり、教員としての実践的な指導力を育成するための教育活動を行っております。今年で15年目を迎えます。

1 学校現場のニーズに即した授業

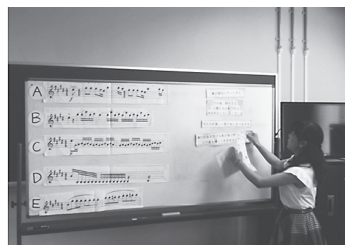
交流人事教員が主担当となって実施している科目には、「授業実践論」「生活科授業研究」「教育法規入門」「教職実践演習」などがあります。それぞれの授業において、学校現場での実践を踏まえた授業を行っています。

「授業実践論」では、教員の校種や専門研究分野を生かした授業を行っています。教員として求められる基本的な授業づくり(学習課題づくり、発問、板書の仕方等)を踏まえ、指導案を作成し、模擬授業や授業後の討議を行うなど、より実践的な授業研究を行っています。

「生活科授業研究」では、校外学習に焦点をあて、校外学習を行うにあたっての教員の留意点や教材研究、関係機関との連絡の取り方等を演習形式で学んだり、実際に引率実習したりします。写真は、高松市立新番丁小学校の1年生と一緒に香川大学で「秋みつけ」をしているところです。公立小学校と連携して行っているこの活動も本年で7年目を迎えます。

「教育法規入門」では、基本的な法規(教基法、学教法、免許法、教特法、地教行法、地公法など)及び答申・通知などについての理解を深め、法令遵守精神の高揚を図っています。また、教育に関する新聞記事を配付し解説することで、教育時事への関心もこの授業の中で高まるように工夫しています。さらに、客員教授による教育事情や生徒指導などについての集中講義も実施し、学校現場の実践的な状況についてもふれています。

「教職実践演習」では、主体的に演習や研修会等に参加することを通して、これまでの学生生活で身に付けてきた教員としての資質能力を再確認し、より一層高めることを目的としています。グループワークを毎回取り入れ、チームとして取り組むことの重要性を再確認したり、他者の考え方から自分の視野を広げたり、考えを深めたりすることで、卒業前の学生が学校現場に即した内容を実践的に学習する機会となるよう心掛けています。また、香川県小学校・中学校の教育研究会高松支部のご協力をいただき、現職教員の研修に参加し、学び続ける教員の姿を実際に見ることで今後の将来計画の一助となれればと考えています。



指導案を作成し模擬授業を行う



一年生と一緒に「秋みつけ」

2 教育委員会・学校との連携

従前と同様、人的ネットワークを生かして学内外の橋渡し役を務めています。

昨年度も、地域ブロック研修会での講師、研究大会に向けての指導助言者として、様々な教育活動推進に尽力してきました。

学生に対しては、学生支援ボランティアや学生支援員としての児童生徒へのかかわり方などの相談や、卒業研究に係る授業参観、アンケート調査の依頼、研究会への参加など、様々な体験ができるように配慮しています。学校からは校外学習のサポート、学習支援の依頼などもあり、正規の手続きを踏まえて実施できるように連絡・調整を行っています。

3 学生の教員採用選考試験突破へのサポート

「教職の総合的研究」の授業では、教員採用選考試験に向けて、学生が主体的に取り組めるように具体的な授業内容を講義したり、集団討論や模擬授業などの演習を実施したりしています。

また、学生は「教職自主サークル」と呼ばれる教員採用に向けた自主的な活動を、毎週月曜日18時から19時30分までの1時間半行っており、オブザーバーとして依頼されています。この活動には教員を志望する学生が多く参加しており、学生同士で研鑽する場となっています。活動内容は、集団討論や模擬授業、場面指導などの演習をはじめ、各自治体の教員採用選考試験に関する情報・

意見交換を行っています。交流人事教員も講師を務めるなどしてかわり、教員採用選考試験にとらわれることなく、教育課題をどうとらえるか、問題にどう対応するかなど、学生の考え方に対して、教員としての心構えなどの助言を行っています。また、教採二次対策として「先輩教員からの模擬授業指導」を実施したり、教員としての生活について教職に就いて2～3年程度の経験をもつ卒業生から教職の魅力や困難さなどの話を聞く「卒業生と在校生の交流会」を実施したりしています。このような交流会を通して、「教職自主サークル」を学部生だけのものとせず、卒業した学生が母校に戻ってきて、教育について語り合ったり、親睦を深め合ったりできるような同窓会的な側面をもつ組織にしたいとも考えています。

「教職自主サークル」での学生との交流や「教育法規入門」等の授業によるつながりにより、願書の添削や小論文指導、模擬授業の指導の依頼、悩みごとを抱える相談等、交流人事教員の研究室を訪れる学生は多くいます。教育実習前・中には、指導方法や子どもへの接し方等について相談を受けたり、就職支援員の担当者を中心に、就職支援委員会の教員とともに学生一人一人の就職支援を細やかに行ったりしています。そのような教職支援について分かりやすくまとめたリーフレットを作成し、教育学部3年生に配付し、進路指導に活用しています。



先輩教員からの模擬授業指導



教職支援リーフレット

4 学生とともに地域貢献

昨年度10月16日(日)、教育学部フェスティバル in 香大「未来からの留学生」に「LEGOで遊ぼう！」の講座を開設して、学生と子どもたちがふれあいました。教育実習などでは体験しがたい内容であり、教材教具を作成するアイデアや工夫、子どもにやり方を伝えるための語りかけ方などを学ぶよい機会となりました。また、一昨年度よりリニューアルした「みんなで楽しく音読」には、各領域から参加した30名以上の学生が企画運営に携わり、子どもたちへのかかわり方や音読の指導について学ぶ場となりました。

さらに、一昨年度に引き続き、高松市の「寛学事業音読劇上演会」において、教育学研究部の3・4年生有志が菊地寛の作品を音読劇にしたものを、昨年度は2月に高松市立花園小学校で上演しました。

5 新しく着任された先生

高木愛先生が、香川県教育センターへ主任指導主事として転出され、新たに十河妹先生が着任されました。以下、自己紹介を掲載します。

【学校教育講座 准教授 十河 妹 先生(写真)】

この度、香川県教育委員会との人事交流により着任いたしました。

小学生から大学生と、授業する対象が子どもから大人に変わりましたが、目を輝かせて真剣に授業に取り組む姿は、同じです。久しぶりに授業できる喜びを感じながら、教職を目指す学生たちとの授業に毎日励んでいます。

先日、ある授業で「理想の授業とは？」について、学生たちがこれまで小・中・高と受けてきた授業の中で「思い出に残っている授業とその理由」から一緒に考えました。その中で、学生たちから一番多く出た意見が「子どもの立場に立って考えられた授業」でした。ただ聞くだけではなく参加型で、子ども自らが学びたいと思える授業、まさしく今、大切にされている「主体的・対話的で深い学び」が成立している授業です。私自身の授業はもちろん、学生たちが学校現場に出た時、「理想の授業」ができるようにするために、大学で何を教え、何を学ぶ必要があるのか、について考えていきたいと思います。

19年間小学校教員として、3年間指導主事として勤務させていただいた中で、たくさんの先輩方や同僚、子どもたちから学んだことを振り返りながら、これからの教育界を担う「専門的知識や技能を持ち、たくましく、子どもにとって魅力ある教員」となる学生の養成に貢献できるよう、微力ではありますが一生懸命取り組んで参ります。

今後ともご指導ご鞭撻くださいますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

